



健康の輪



編集●全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局(結核予防会内) 題字●初代会長 廣瀬勝代

「第69回保健文化賞」受賞！

第一生命が主催する「第69回保健文化賞」受賞者に本協議会が団体部門で選ばれたことが、2017年8月29日に開催した本協議会創立40周年記念「婦人の国際会議」の特別講演で第一生命の渡邊光一郎会長から発表され、会場は喜びに包まれました。そして、贈呈式が10月12日（木）に行われ、推薦いただいた結核予防会の工藤理事長と共に木下会長が出席しました。厚生労働大臣から表彰状、第一生命保険株式会社から感謝状と賞金が贈られました。翌13日には天皇皇后両陛下への拜謁を賜りました。

【受賞対象となった業績】

昭和50年以来、行政と住民の架け橋となり、結核の健診奨励、BCGワクチン接種率の向上等、全国組織での結核予防の知識の普及啓発活動を通じて、地域の健康管理に積極的に寄与するとともに、近年では慢性閉塞性肺疾患（COPD）の予防と早期発見のための啓発活動に尽力している。



贈呈式（2017年10月12日）



感謝状、表彰状を囲んで（2017年12月4日）

カンボジアスタディツアーに参加して～思いを背に刻んだポロシャツでの熱い旅～

公益財団法人北海道結核予防会
事業企画課長 池田 千聖子

12月11日成田のホテルに集合した一行8名は、12日午後プノンペンに到着しました。3人乗りのオートバイ、タクシー代わりのtuktukやピカピカの高級車が交差点を埋め尽くす光景に圧倒されるどころから、見て肌で感じるカンボジアスタディツアーが始まりました。現地に足を運んでこそその数えきれない貴重な経験でしたが、なかでも心に深く刻まれた事柄について紹介します。

渡し船にワゴン車のまま乗り込みメコン河を渡り、道路脇の水牛の大きさに驚きながら車に揺られて1時間余、ピアレン医療地区にて州病院を見学しました。日本のプロジェクトから贈られたことを示す日の丸に並んで、結核予防婦人会のシールが貼られた医療機器が活躍しています。婦人会一行は笑顔で「おはようございます」と待合室の患者さん達に声を掛け、カンボジア式に胸の前で掌を合わせて会釈しています。それに応えてこぼれた患者さんの笑顔に、言葉は違っても笑顔と挨拶が心を通い合わせる姿に改めて感激しました。前日にカンボジア結核予防会にて、活動資金として役立てていただく1,000ドルを届けたばかりです。お預かりした募金が形を変え、この笑顔にまで届くことに思いを巡らせ、感慨深い気持ちでいっぱいでした。

結核予防会が開設に取り組んでいる検診・検査センターは国立保健科学大学の構内に位置し、最新の検査機器やX線撮影装置等を備えた施設は、カンボジアの結核制圧に向けての新しい切り札となるばかりでなく、結核対策に従事するスタッフにとって素晴らしい学びの場となることが期待されています。結核予防会のスタッフから現地スタッフが学んでいるのは、熟練した技術の習得だけでなく、コミュニケーションの良さやチームワークも身につけていると薬学部長セナ様から驚きと尊敬をもって受け止められていました。

ツアーの締めくくりとして、日本大使公邸に一同揃って表敬訪問する機会を得ました。結核の罹患率は日本13.9、カンボジア344と、約50年前の日本に近いカンボジアの結核の現状や、婦人の国際会議へのカンボジア国会議員ローケン氏の参加、そして私たちスタディツアーのカンボジアでの取り組み、現地のヘルスリーダーが活動時に着用するポロシャツを募金で作成し毎年届けていることについて報告しました。堀之内大使の柔和な笑顔に一行の緊張もほぐれ、カンボジア結核予防会へのお力添えもしっかりとお願いしてまいりました。

このようにいくつもの経験は、いつでもスタッフユニフォームのポロシャツと共にありました。同じポロシャツ姿のヘルスリーダーがカンボジアの地元で活躍していきますよう、ポロシャツを着て過ごした暑いプノンペンでの経験を多くの人に伝え、募金運動への取り組みを今以上に行っていきたいとの思いを強くしています。結核予防会支部職員としてこのスタディツアーに婦人会の皆様とご一緒させていただきありがとうございました。🐾



在カンボジア日本国大使館を表敬訪問
(中央は堀之内特命全権大使)



カンボジア結核予防会訪問 (右端筆者)



国立保健科学大学訪問



カンボジアで活躍する医療機器



ピアレン医療地区を視察

会長就任ご挨拶

栃木県結核予防婦人会 会長 櫛淵 澄江



このたび、平成29年度より栃木県のまとめ役を仰せつかり、重責を担い身の引き締まる思いです。

「結核は昔の病気でしょ」と多くの人から返ってくる言葉を聞く度に、私達の活動の必要性を強く感じ、心が焦っております。

恒例となっております知事表敬訪問を行い、結核はまだ過去過去の病気ではなく、高齢化社会の進展に伴って高齢の患者さんが多いこととお話ししました。高齢の患者さんに対する早期発見への啓発を強化し、大切な尊い命を救える活動とし、それに伴って募金額減少に歯止めをかけ、複十字シール運動の更なる拡充・継続を進めていく意味を理解し、大きく輪を広げ、力を注いで参りたいと決意を新たにしております。

福井県健康を守る女性の会 会長 酒井 艶子



この度、「健康を守る女性の会」の会長に就任させていただきました。偉大な前会長の後任ということで、本当に何をどうしてよいかかわからず、ただ戸惑っている状態です。若輩者の私がやっていると、自信がありません。会長という重責。どうしよう！でも、お引き受けしたからにはやらなければなりません。微力ですが重責を全うしなければなりません。会員のみなさんのお力とご協力があってなんとか歩むことができるのではないのでしょうか。

“健康を守る女性の会”とは、健康に関する活動、結核根絶に関する活動の団体です。結核は過去

の病気ではありません。2016年の新登録患者数は17,625人で、その内約6割が高齢者となっております。みなさん、すべての人がいつか高齢者になるのです。このような状態で何かお役に立つ活動がないか…。

私の暮らしているまちは、7万人弱の人口のところでは、“ものづくりのまち”市民ががんばって生活しています。結核に関する活動として、複十字シール募金運動に、一生懸命取り組んでいます。結果的に市民、市長、市議会議員、行政職員と、みなさんの協力のもとに、多額の募金額となっております。これも皆さんのご理解とご協力によって成り立っています。

結核は、働き盛りの若い人にも罹患率が高いといわれています。微力でも会員のみなさんが声かけを通じて行った募金によって、世界中から結核という病気がなくなりますように願っております。これからも私たちの活動が少しでも世界中のみなさんにお役にたてれば幸いです。

こんな未熟な会長を支えてくださる関係者のみなさんに、感謝とお礼を申し上げます。

今後ともみなさんのお力と協力を信じてがんばらせていただきます。よろしく願い申し上げます。みなさん、一緒にがんばりましょう！

広島県地域女性団体連絡協議会 会長 佐藤 浩子



広島県地域女性団体連絡協議会は今年で創立70周年を迎えます。昭和23年、原爆の被害が残る焼け野原に、平和の願いを込めて女性達が立ち上がり、前身となる広島県婦人連合会が結成されました。当時、国民病と言われた結核は多くの人々に苦難をもたらしました。そこで、「結核予防は主婦の手で」をスローガンに、家庭婦人を対象とした教育や広報

活動が実施され、婦人会も健康診断の手伝い等に参加するなど結核予防対策に積極的に関わってまいりました。先輩諸姉が地域と共に活動してこられた姿勢は今日の私たちの活動に受け継がれています。これからも複十字シール運動を通して、多くの県民が結核予防に関心を持ち、健康で豊かな生活が送れるよう啓発活動を進めたいと思っています。

2月13・14日、第69回結核予防全国大会が広島で開催されました。全国からたくさんの皆さまをお迎えできましたことは大変光栄です。平和都市広島で心から感謝しています。

熊本県健康を守る婦人の会 会長 棚橋 康子



熊本県地域婦人会は、全国の他の婦人会と同様に、結核予防活動資金のため、複十字シール募金活動に励んでいます。なぜ、婦人会が中心となってこの募金活動を実施するのかという充分な説諭がないままで、現在に至っているのではないかと危惧しています。その上、熊本県では数年前から、事務処理が地域保健所から婦人会に移行されました。そのため、この結核予防事業がまるで官から民間へ移行したような印象を募金者に与えています。本来、結核予防事業は保健所を中心とした行政の仕事です。その活動資金募集の面でのみ、民間である婦人会を中心とした女性団体が協力しているという事が理解されていないと思います。現在、若い婦人会員の中から「なぜ、この募金活動を婦人会がしなければならないのか？」との疑問が多く寄せられています。会員減少に悩む婦人会としては、ここでシール募金活動のやり方を再考する必要があると思っています。🐼

複十字病院の呼吸リハビリテーション ～結核で始まり、今はCOPD(慢性閉塞性肺疾患)などに～ 結核予防会総裁 秋篠宮紀子

昨年12月、東京都清瀬市にある結核予防会複十字病院を訪れました。昨年の結核予防全国大会や結核予防婦人会の講習会で、肺の生活習慣病であるCOPD(慢性閉塞性肺疾患)の予防や治療についての話を聞き、患者の生活の質を上げるためにはリハビリテーションが大変重要であることを知りました。そして、複十字病院では「呼吸リハビリテーション」に力を入れているので、一度見学してみませんかとお誘いがあり、この機会に伺うことができました。

呼吸リハビリテーションと複十字病院の歴史

広い敷地の中にある、自然に囲まれたこの病院は、1947(昭和22)年に、結核研究所臨床部として発足しました。結核の患者が多かった1958(昭和33)年には、結核病床が630ありました。現在、複十字病院は、高度で専門的な結核の診断と治療の拠点として、標準的な治療薬が効かない多剤耐性結核の治療など、重要な役割を担っています。また、結核以外の呼吸器疾患の診断と治療、大腸がんや乳がんなどの治療でも実績を上げています。

呼吸リハビリテーションは、元々は、肺結核に対する外科手術を受けた患者のために始まりました。その草分けは、1959(昭和34)年、留学先のスウェーデンで刊行されたばかりの「肺機能訓練療法」の手引き書を日本語にいち早く翻訳した、島尾忠男結核予防会顧問です。当時は、肺結核の治療のため

に肺の一部や肋骨などを切除する外科手術が多くおこなわれており、手術後の患者が呼吸や運動の機能を維持・改善するために、呼吸法や運動療法などのリハビリテーションが導入されました。

現在の呼吸リハビリテーションは、COPD、間質性肺炎、気管支拡張症や、肺結核、肺がんなどの呼吸器疾患の患者に加えて、その他の疾患で胸部を手術する患者の術前・術後にも、幅広くおこなわれています。

呼吸器に慢性的な病気があると、息切れや呼吸困難となり、酸素吸入が必要になることもあります。息切れがあると、歩いたり家事をしたりなどの日常的な動作でも苦しくなることがあり、日々の生活をする上で、不便や困難が増えます。また、思うように動けないことや息苦しさのために、気持ちも辛くなります。患者の約6割が、うつ状態になるともいわれています。呼吸リハビリテーションは、呼吸法や身体の動かし方の習得、身体の筋力や柔軟性を高めるトレーニングなどによって、息切れを軽減し、運動量を増やして、生活の質を向上させるためにおこなわれます。

呼吸ケアリハビリセンター

複十字病院では、2009(平成21)年に、呼吸リハビリテーションを専門におこなう施設として「呼吸ケアリハビリセンター」(呼吸ケア診療科)が設立されました。このセンターは、病院の建物の1階に

あり、二方向に開いた大きな窓から陽の光に照らされた草木の緑が見える部屋です。

12月に訪れたときには、10名ほどの方が、理学療法士とともに、腹式呼吸など呼吸法の練習、痰を上手に出す練習、携帯用酸素ボンベの扱いの練習、身体の柔軟性や持久力を高め、足腰の筋力をつける運動などに取り組んでおられました。

リハビリセンターの吉村センター長のご説明の後、千住先生に案内されて、3人の方からお話を伺うことができました。



リハビリセンターにて

上の写真の左に座っていらっしゃる70歳代の男性の方は、リハビリテーションのために通院されています。お話を伺う前まで取り組んでいらしたのは、お腹に重りをのせての腹式呼吸の練習でした。初めはリハビリテーションが苦しく、2,000歩も歩けなかったのに、今では8,000歩も歩けるようになり、階段や坂道も上がれるようになったそうです。息切れのために中断していた仕事を再開し、趣味のボウリングも楽しんでいらっしやいます。COPDに呼吸リハビリテーションが重要であることを

他の患者さんに教えているほど、熱心に取り組まれていると伺いました。ご自分の症状や体調をきちんと把握して、できるだけ身体を動かし、よい生活をしようとする意欲を、頼もしく感じました。

次に、80歳代の女性の方のお話を伺いました。若いころから喫煙習慣のあったこの方は、60歳代にCOPDと診断され、禁煙されたそうです。しかし、加齢とともに息切れが強くなり、5年ほど前から日常生活の動作にも支障を来すようになり、在宅酸素療法と在宅介護を受けていました。そして、呼吸リハビリテーションのために、この病院に入院されたと伺いました。

リハビリセンターでは、呼吸法を練習するほかに、横になったままで足を動かす運動などをして、下肢の筋力をつけていらっしゃいました。20mの歩行訓練もされているそうです。これからの目標は、リハビリテーションを続けて、室内で介助なしに日常的な生活の動作ができるようになることだというお話でした。

このように、呼吸の改善と足腰の筋力の強化によって、寝たきりになることを防ぐのも、呼吸リハビリテーションの目的の一つです。

続いてお会いしたのは、70歳代の男性で、COPDが悪化して入院し、退院後に在宅酸素療法を始めて1年ほど経った方です。

現在は1カ月に1度通院し、リハビリテーションを続けていらっしゃいます。お話を伺う前までは理学療法士と一緒に上半身の柔軟体操をし、お話が終わると、室内のウォーキングマシンで早足に歩く運動を始められていました。

当初、ご本人には酸素吸入に抵抗がありましたが、お孫さまの習い事の送迎をしたいお気持ちがあり、奥さまが股関節の手術経験からリハビリテーションの大切さを

ご存じで、その励ましもあって、治療とリハビリテーションに積極的に取り組むようになったと伺いました。

昨年の秋は、結婚50周年記念に、お子さま、お孫さまと一緒に北海道を旅行されました。事前に航空会社に連絡・登録をして、酸素ボンベを使いながら飛行機に乗ることができ、関係事業者の協力のもと、宿泊先に酸素ボンベと酸素濃縮器を届けてもらうこともできました。

在宅酸素療法

在宅酸素療法は、自宅で生活しながら、室内の空気よりも高い濃度の酸素を補い、呼吸や運動を楽しむ療法です。自宅では据え置き型の酸素濃縮器を使い、外出するときは携帯型の酸素ボンベを使います。



リハビリセンターの酸素濃縮器



酸素ボンベ、持ち歩き用のリュックサックと2種類のカート

酸素ボンベは、個々のニーズに合わせて、リュックサック、手押し式のカートや、引いて歩くカートなどで持ち運びます。バッテリーを内蔵している酸素濃縮器は、停電した時にも数時間作動します。

皆の努力や支え合い

お話を伺った3人は、病状もリハビリテーションの内容もそれぞれ異なりますが、身体の状態に合わせた運動をして足腰の筋力をつけ、身体の動かし方を工夫し、腹式呼吸などの呼吸法を身につけることにより、息切れを減らし、運動量を増やす努力をされていることがわかりました。

千住先生からは、患者さん同士が支え合っている、というお話がありました。先にリハビリテーションを始めた人が、新しく始める人へ、ご自分の病気やリハビリテーションの経験などをお話しして、助け役（ピア・サポーター）になっているそうです。同じ病気の治療を受けている仲間がいることは、励みになるだろうと思いました。

また、医師、看護師、理学療法士や薬剤師が、皆で連携して呼吸リハビリテーションに取り組んでいることが理解でき、関係者の努力と熱意を感じました。たとえば、理学療法士がリハビリテーションを指導する際に、動作や運動の目的を、一人ひとりに丁寧に説明していたこと、そして患者さんたちも明るい表情で理学療法士と話しつつリハビリテーションをおこなう様子が心に残りました。

COPDは、禁煙によって予防することができ、早期に治療すれば重症化を防ぐことのできる病気です。より多くの人にこの病気が知られるようになれば、予防が進むとともに、症状のある人が早めに病院を受診しやすくなるのではないのでしょうか。そして、呼吸リハビリテーションによって呼吸の苦しさをやわらげ、生活の質を高められる人が増えるよう願っております。

平成29年度地区別結核予防婦人団体幹部研修会（5地区）開催

北海道地区

北海道健康をまもる地域団体連合会
会長 齋藤 芳子



北海道家族の健康をまもる講習会は第50回を迎えました。平成29年7月7日～8日、国立大雪青少年交流の家において、北海道保健福祉部健康安全局長村井篤司様よりご挨拶を頂き、記念大会の開催となりました。5月に第68回結核予防全国大会が開催されましたので式典は挙行いたしませんでしたが、「50年間のあゆみ」を発行して、次のような研修が実施され、参加者から充実した内容であったと感想が寄せられています。

開講式に続き、ハイキング・パークゴルフ・ホビークラフト・全体交流会に移り、「あなたの地域の健康づくり」をテーマにグループワークを行い、発表、花笠音頭で盛会のうちに第1日目が終了しました。第2日目は、1講目に旭川医科大学北田正博教授による「遺伝する乳がん」、2講目に結核研究所放



射線学科星野豊先生の「婦人会の皆さんと考える結核予防のために出来ること」と題して頂き、充実した楽しい講演を拝聴致しました。

私達は地域に戻り、この研修を生かして地域に根ざした健康づくりに努力してまいります。

東北地区

結核予防婦人会秋田県連合会
会長 小玉 喜久子



平成29年度東北地区結核予防婦人団体幹部研修会は、11月16日～17日に、男鹿市男鹿観光ホテルを会場に東北6県から約

140名が参加し、盛大に開催されました。

研修会では「婦人会創立40周年～結核予防活動と婦人会の役割～」をテーマにシンポジウムを行い、シンポジストの各県代表の活動事例発表、コーディネーターの結核研究所対策支援部副部長 永田容子先生から示唆とみのりをいただきました。

続いて、結核研究所名誉所長 森亨先生より「ワクチンで子どもを守ろう—BCG接種—」と題してBCG接種の効果と大切さをご講演いただき、地域での活動として広めていきたいと思いました。特別講演では、男鹿水族館GAO本川博人館長が「水族館の歴史と機能について」と題して興味深く語られ、私たちは早速次の日、男鹿水族館を訪ねました。小春日和の青い海に感動しました！

懇親会では、なまはげの郷ということで『なまはげ太鼓の熱演』、郷土料理の『石焼なべの実演サプライズ』と盛り上がりました。各県からのアトラクションで絆を強め、充実した研修会の思い出が広がっています。



関東甲信越地区

神奈川県地域婦人団体連絡協議会
会長 松尾 美智代



第13回関東甲信越地区結核予防婦人団体幹部研修会が、神奈川県のホテルモントレ横浜において開かれました。90余名の参加による研修会で、結核予防会の

工藤翔二理事長による「高齢者の肺の病気」のご講演、次に結核予防会結核研究所の森亨名誉所長の「ワクチンで子どもを守ろう (BCG接種)」のご講演をいただきました。高齢者結核のこと、生活習慣病であるCOPDは肺だけではなく全身に及ぶ病気であること、初期症状の時は胸筋を鍛えるとよいこと、BCG接種によるワクチンで子どもを守る等、身近な問題がわかりやすく深く理解できた講演でしたとの声も聞かれました。

班別討議ワークショップでは、若い人との感覚の違いで戸惑うことがあること、私達は今までの体



験を生かし正しく伝達する必要があること、ギャップのあることは志のあることで、一歩前進で喜ばしいこと、活動を通して一層の理解・親睦が深まること、結核予防啓発活動は街頭啓発シール募金など広く周知することが望まれること、低蔓延国化と言われている中、私達は正しい理解のもと次世代につなぐ活動を推進して行くこと等の討議がなされました。

すばらしい成果の挙げた研修会であったと思います。

中国・四国地区

一般社団法人香川県婦人団体連絡協議会
事務局長 小野 美津子



12月12日にホテルパールガーデン(高松市)で、140人の参加を得て、第18回中国・四国結核予防婦人団体幹部研修会が、「いのち育む瀬戸内から～予防ファーストで健康長寿～」をテーマに開催されました。本会も結核予防に尽力し、2020年までに低蔓延国となるのを目標として予防、根絶に頑張っていきます。

続いて研修会が「めざそうなくそう結核 予防ファーストで健康長寿」のテーマで、「ワクチン

で子供を守ろう BCG接種」森亨氏、「香川県の結核の現状」東條泰典氏、「結核予防婦人団体と複十字シール運動」小林典子氏、「女性の健康サポートセミナー」楠木弘次氏の講演をいただきました。まだまだこれからも結核予防の必要性を説明されました。私達婦人会によるシール運動はただ募金するのではなく結核根絶を訴えることです。懇親会には来賓をお迎えして、9県の幹部たちの和やかな交流会を開催し、お国自慢も飛び出して2時間を楽しく過ごしました。

翌12月13日には、サンポートホール高松の大ホールで1,000人の参加を得て研修会を開催し、オープニング 香川県立高松商業ガールズの書道パフォーマンスと、基調講演「健康はあなたの幸せ、世の宝」樋口恵子氏をいただきました。樋口先生はご自身も結核を患いましたが療養中にゆっくりと本を読めたこと、同じ結核になった友人と文通を通じて人との交わりの中から意識して学ぶ態度が身についたこと、今から近所の仲間と助け合える状況をつくっておくこと、平和な時代に生まれたことに楽しみ、幸運なことを喜び感謝しながら生きていきたいと思いますと講演されました。

2日間の研修会を通じて健康な生活を続けていく大切さを切実に感じました。



九州地区

福岡県結核予防婦人会
会長 木下 幸子



平成29年11月13日～14日、九州各県から246名のご参加を頂き、ホテルオークラ福岡で第49回目の講習会を開催いたしました。

1日目はまず、結核予防会結核研究所の森名誉所長と福岡市保健予防課の元木保健師にご講演いただきました。

森名誉所長のお話からは、世界の結核の状況や小児結核が重症化しやすいこと、子どもに対するBCG接種の予防効果が高いこと等を知り、複十字シール運動の取り組みをより充実させるとともに、引き続き子どものBCG接種を強く呼びかけていくことが大切だと再認識いたしました。

また、元木保健師のお話からは、福岡市が47都道府県と20政令指定都市の中で最も外国人結核患者の割合が大きくなっていることを知り、私達も近年の状況にあわせた普及啓発の方法を模索していかなければと強く感じました。

続いて、(株)ケイ・アール・ジーの小川社長と私とで、カンボジア結核対策スタディツアー2016のご報告をさせていただきました。シール募金が世界で大いに役立っていることを知り、皆さんにもっと誇りを持って活動していただければ幸いに思います。

また、その夜の交流会では、ホテルの美味しい食事を楽しみながら、各県飛び入りのカラオケ大会やズンドコ節の曲にあわせた炭坑節の総踊りで盛り上がり、親睦を深めました。

2日目は、「地域における結核予防婦人会の活動」をテーマにシンポジウムを行い、福岡県結核予防会の是久副理事長の進行の下、大分県・鹿児島県・福岡県の代表の方に各県の取り組みについてお話しいただきました。その後の総合討論では、どうすれば複十字

シール運動をより多くの方に知っていただけるか等、時間一杯の議論が行われました。

地区別講習会は、結核対策の第一線で活躍されている講師の方々や他県婦人会のお話を伺うことができるとともに、「九州はひとつ」を再確認し、団結力を深めることができる有意義な機会です。

今後とも「結核予防は主婦の手で」の信条の下、九州、日本そして世界の結核の制圧に向け、行政



及び結核予防会と密に連携しながら、複十字シール運動の取り組みをより一層充実させてまいります。



複十字シールキャンペーン活動報告

特定非営利活動法人岩手県地域婦人団体協議会
会長 瀬川 愛子



結核予防会支部を担う県予防医学協会と岩手県地域婦人団体協議会では、運動開始日の8月1日、県予防医学協会武内専務理事をはじめ私ども役職員9名で達増知事を訪問し、結核の予防や周知を図る複十字シール運動をPRしました。

県予防医学協会によると、岩手県では2015年度の県内の新規結核患者数は131人で、年々減少しているものの高齢者の発症が多いのが特徴です。「結核はすでになくなった病気との誤った認識もあり、末端まで理解を広げるのは難しいが、これからも緻密に活動を続けていきたい」と協力をお願いしましたところ、達増知事は、「県民の健康を支える大きな役割を果たしているみなさんの活動に大いに期待している」と理解を示してください、今後の運動に大きな力をいただけると心強く思っております。会員みなでさらに広く理解を得るための努力をしていきたいと思っております。



埼玉県地域婦人会連合会結核予防会
会長 柿沼トミ子



私たちの実施している「複十字シール運動」の目的や活動に関することを報告するために、平成29年8月4日上田埼玉県知事を表敬訪問いたしました。当日は埼玉県地域婦人会連合会結核予防会10名と埼玉県健康づくり事業団とで、県職員への運動協力依頼と結核予防週間における普及啓発活動について説明をいたしました。後日、表敬訪問が埼玉県ホームページ「知事の部屋：公務フォトアルバム」に掲載されております。

9月23日は「結核は過去の病気ではない」ことを多くの方に知っていただくために、「複十字シール運動街頭募金」をJR大宮駅西口歩行者デッキにおいて行いました。午前中、道行く方々に募金を呼びかけながら、小型シールやリーフレットやグッズを配布しました。お子様連れのお母様には興味を持っていただけましたが、今後もより広く運動を続けることにより結核の意識を高めていき、新規患者数の減少に繋げていきたいと考えております。



愛知県地域婦人団体連絡協議会
会長 村上 千代子



愛知県地域婦人団体連絡協議会として、全国一斉複十字シール運動開始に合わせ、8月2日(水)に愛知県庁副知事室へ、公益財団法人愛知県健康づくり振興事業団 河隅彰二理事長、愛知県健康福祉部保険医療局長、課長とともに会長、役員3名が同行させていただき、宮本悦子副知事を訪問し複十字シール運動への協力を依頼いたしました。

県内では勿論ですが、あいち健康プラザ(大府市)では早期発見に向けた健診の呼びかけ等の啓発活動をしています。結核は過去の病気ではありません。平成27年のデータによりますと、愛知県では名古屋市を除いて136名の方が結核で亡くなっています。

私たち一人ひとりが結核予防を中心とした健康づくりに果たす婦人会の役割をよく認識して、健康で明るい生活、社会を実現するための方法や活動について自分自身の問題として考え、少しずつでも生かしていきたいと思っております。

結核ってどんな病気? から始まり、基礎知識を得ることが大切だと考えています。よく理解し、かかったら治し、自分自身や身近な人たちを結核から守ることになり、明るい笑顔の生活に繋がることとなります。

県地婦連は、更に複十字シール

運動の輪を広げてまいります。



京都府結核予防婦人会
会長 田野 照子



全国一斉に行われる平成29年度複十字シール運動開始に合わせ9月7日、会長、副会長で山田知事を表敬訪問しました。知

事表敬訪問は初めてのことでしたので、全国結核予防婦人団体の活動（結核予防全国大会、結核予防関係婦人団体中央講習会、地区別幹部研修会）に参加、受講し、結核についての今日の現状等正しい知識を学んでいること、そして複十字シール運動の意義についてお話しさせていただき、ご理解とご協力をお願いいたしました。山田知事から「地域で暮らす人々を思い、健康等見守りの活動が大事です。そして大きな連帯になるのですね。がんばってください」と励ましの言葉をいただきました。

毎年、市町の行政健康推進課等を訪問し、複十字シール運動を理解していただけるようにお話しさせていただいています。また、結核予防の啓発普及に婦人会独自の



チラシも作り、一人ひとりに手渡して話をし、募金の協力を地道に進めています。そのことで運動の輪が広がっていくと実感を得ています。

徳島県結核予防婦人団体連合会
会長 藤田 育美



キャンペーン開始日の8月1日に、結核予防会徳島県支部の方々と当団体役員で徳島県知事を訪問し、複十字シール運動の意義や目的について説明し、広く県民にも普及を図っていただけるよう要望をいたしました。

その他、9月11日には徳島県主催の「健康のつどい」で複十字シール運動を実施いたしました。

また、会員への啓発推進のため、私自身が講師となり3地区の婦人会（延べ450人）と11月22日に開催した「活動発表大会」では800名の会員に向けて講演会を実施いたしました。講演では一昨年参加した「カンボジアスタディツアー」の報告や「すこやかに」、「結核の常識」等の冊子を用いて、募金運動に取り組む理由や成果についてお話をし、結核が過去の病気ではないこと、そして継続して運動に取り組むことがいかに重要であるかということと呼び掛けました。

1人でも多くの方に複十字シール運動の本質をご理解いただき、活動の輪を広げて参りたいと思います。



長崎県地域婦人団体連絡協議会
会長 西山 智子



私たち結核予防婦人団体は日本最大の健康に関する婦人組織です。会員は全国各地域で結核予防会と連携して、結核予防の啓発活動・複十字シール運動等行政の力が及ばない分野で熱心に活動を続けております。長崎県では「結核予防は、主婦の手で」をスローガンに掲げ、結核についての教育や広報活動の強化に努めております。

毎年県福祉保健部長への表敬訪問で結核の現状、複十字シール運動の意義・募金の状況を説明するとともに、婦人会として結核予防会長崎県支部や長崎市役所の方々と一緒に長崎市浜の町ベルナード観光通りにてパネル展示や、リーフレット・カットパン・マスク等をセットにし、街行く人には「風邪が長引くようでしたら病院へ、結核は昔の病気ではありませんよ」と呼びかけ、700セットを配付しました。地域ではイベント・福祉まつり等活発に取り組んでおり、地域によって温度差があるので行政や他団体にも呼びかけていかなければなりません。努力目標としてまずは役員が結核に対する知識と、正しく伝えることの大切さを学び、県内各地で活発な活動を展開していきたいと思っております。



編集後記

前号「健康の輪121号」の表紙で、2017年のシール図案で大型24面・小型6面の合計30面の中でただ1枚だけの3図案のうちの一つをご紹介します。

今お読みいただいているこの122号の表紙にもう一つ、そして残りの一つがこの図案です。30分の1という希少な図案です。ラッキーな気分を味わっていただけましたら幸いです。

(三)



ちふれ化粧品は・・・

「誰もが手に入れやすく、安心してつかえる化粧品を。」という思いを込めて創り出した私たちの化粧品です。



ちふれが、約束すること。

- **高品質・適正価格であること。**
製造や販売にかかる余分なコストを削減して、高品質を適正な価格でお届けします。
- **無香料・無着色であること。**
肌によさしくありたい。だから、ちふれのスキンケアはすべて無香料・無着色です。
- **全成分・分量・配合目的を公開すること。**
品質の確かさや商品の安全性だけでなく、自分の肌に合った化粧品の内容を知っていただくためにも、すべての製品の全成分・分量とその配合目的を公開しています。
- **製造年月をすべての容器に表示すること。**
誰にもわかりやすく、安心して使えるように、製造記号を製造年月で表示しています。
- **環境問題に配慮すること。**
毎日使う化粧品だからこそ、環境を大切にしたい。ちふれは、詰替化粧品や植物由来容器の導入などで、環境問題に配慮しています。



ちふれ

あなたの、健康のそばに。



大正製薬



しあわせは、明日も健康であること。

人々の健康意識を高めること、日々の生活をOTC医薬品でサポートすること。
それが「セルフメディケーション」をスローガンに掲げる私たち大正製薬の使命。

OTC 医薬品のリーディングカンパニーとして、

より優れた医療用薬品の開発に力を入れるチャレンジャーとして、
常に「生活者の健康でより豊かな暮らし」の実現を目指しています。